私の家に求めるモノの変遷

有限会社 Lusie（ルーシー）代表　小　泉　寛　明

小泉と申します。よろしくお願いいたします。今、ご紹介いただきましたように、私は不動産業というのをやってまして、個性のある家とか、古くて趣がある家だとか、山の中でもうつぶれそうな小屋とか、そういうのを救うというか、次の人に使ってもらうというのが仕事として、通常、させていただいているんですけれども。きょうは、どちらかというと、自分が住んできた家ってどんなんだったのだろうというのを振り返ってみて、じゃあ、それときょうのお題でもあるモノっていうのがどう関係してんのかなっていうのを自分なりに考えてみたというような、感覚的な話だったり、経験的な話だったりするかもしれないんですけど、しばしお付き合いいただければと思います。

通常の自己紹介の仕事としては、農業に関わるファーマーズマーケットとか、FARMSTAND っていう野菜を売ってるお店だとか、都会で農業するようなアーバンファーミング、もしくは、田舎で農業をするような農業スクールみたいなのを運営したり、シェアオフィス、ROKKONOMAD、KITANOMAD。北野と今、六甲山の山上でシェアオフィスなどの運営を行っています。その中で、中核の事業としては、古くからもう 12 年目になるんですけど、神戸 R 不動産という、古くて趣がある家を探しては流通させていくというような仕事をさせていただいてます。個人的なことなんですけども、仕事をし始めたのが 20 代からなんですけども、その頃から引っ越しを重ねてきたのが今、数えてみると、40 回、引っ越しをして。その 40 回も、どんな家だったかなというのを振り返ってみて、実は、その間取りとぴたっと合うものはなかなかなかったんですけど、そんな感じの間取りみたいなのをざーっと見ながら、どんな家に住んできたっていうか、さらけ出してみようという形です。

私は千里ニュータウンで育って、極めて郊外型の一軒家に、典型的なニュータウンみたいな所で育ちました。そこから、関西の大学を出て、就職をしようかなと思ったんですけれども、やっぱり、ちょっと違う道に進みたい。当時、読んだ本が環境の本で、『成長の限界』という本を読んで、これは、これから環境の問題の時代だというふうに思いまして、町づくりの時代だと思って、南カルフォルニアにあるカルフォルニア大学アーバイン校のソーシャルエコロジー学部に進学することにしました。

夏に初めて移り住んだのは、大学の寮で、いわゆる、家具が作り付けであって、ベッドが自分の部屋にあってっていうシェアハウスで、全部、ある程度の家具と食器とかも付いてるような家でした。そこから、3 カ月で出ないといけなかったので、大急ぎで家を探して、次、住んだのが 75 平米ぐらいあるワンルームマンションです。なかなかカリフォルニアだと、結構、豪華なワンルームしかなくて、1 人暮らしをするにも、まあまあな金額がかかって、寮を急きょ追い出されたんで、自分で探して見つけたら、いい家しかなかったっていうような状況だったんですけども、こういう家に住んでる人はほとんどいなくて、住宅市場の中には、ほとんどがツーベッドルームとか、スリーベッドルームのマンションっていうような感じです。

なので、学生さんは普通は、アメリカの大学生は、ツーベッドルームを2人でシェアしたり、4人でシェアしたりみたいな感じで住むのが一般的で、私もすぐそこのワンルームマンションに住んでたら、1人で寂しいんで、友達になった韓国人とシェアするっていうような生活を始めました。この韓国人とシェアしたの、よかったんですけど、その友達がもうリビングで昼間からずっと飲みっぱなしの人間でして、ちょっと一緒に生活できないなっていうふうになって、次はアメリカ人と一緒にシェアをしてました。これも夏だけっていうふうな約束だったんで、夏で出て、次はポーランド人の人と4人でツーベッドルームの部屋をシェアしてた。これは間取りは一緒ですけど、違う部屋に引っ越しをしています。当時できた彼女がいまして、彼女がじゃあ、それだったらうちの実家に住んだらみたいなこと言われて、彼女の実家に居候させていただきました。戸建ての2階建てのおうちのツーベッドルームのお部屋に居候させてもらったみたいな感じでした。

今度、就職します。就職して、東京に引っ越しました。やっぱり、東京で一度、働いてみたいなと思って、大学院を卒業してから、東京の森ビルという会社に就職して。芝公園にワンルームマンションの寮があったので、そこに住み始めます。って思ったら、アメリカに住んでた当時、付き合ってた人が東京に来るっていうんで、ちょっと狭いんで2DKに引っ越そうと。2DKに引っ越して、中目黒に引っ越して。そうしたら、今度、森ビルの社宅が空いたので2DKが空いたから、神谷町って所に引っ越してみたいなことをずっと繰り返して。ほんで、またアメリカに彼女が帰りたいというから、アメリカに帰ってまた実家に居候したり、そこから、実は一回、結婚したんですけど、別れて。今度は日本人の友人と台湾人の友達とシェアして、アメリカに住んでみたいなことで、どんどん。ほんで、また東京に戻って、五反田のマンスリーマンションに住んだり、新橋に当時できてたシェアハウスに住んでみたり、伊豆の修善寺のワンルームに住んだり、中之島のワンルームに住んだりみたいなことを繰り返して、今、北野に住んでますと。神戸の北野に住んでます。

ここずっと引っ越しをごろごろ繰り返してきたんですけど、その引っ越し病がやんだのが北野でして、突然というわけでもないんですけど、結婚もしたということもあって、落ち着いたっていうのが理由なんですけど。バツイチ同士の結婚で、うちの奥さんは2人、子どもがいたんですね。突然、4人家族になりまして、今までどんどん移動する生活をしてきたんですけども、突如、外国人マンション、フォーベッドルーム、たまたま北野にあるインド人が所有してる、坂の上のほうにあるぼろぼろのマンションで、150平米ぐらいある外国人マンションで、すごく広くて心地のいいマンションなんですけど、そういうマンションを格安で見つけまして、なんかこれ面白いなということで、一応、定着するようになったんですけど。

ここまでを人生の第1ステージと呼ぶと、ノマド的にいろいろ動き回るための家に住んでたなっていう感覚があります。荷物もほとんど持たず、スーツケース1個で動いてました。なので、洋服もほとんど最低限で、ちゃぶ台を1個持ってたような。折り畳めるちゃぶ台を持って、ワンルームの部屋にぽんと入ったとしても、ちゃぶ台広げて、ちっちゃなテレビだけつないで、寝袋でまず生活を始めるみたいなことをしてました。今でこそ、シェアハウスだとか、いろいろノマドの人の向けのサービスとかが始まってきたので、こうやって移動生活っていうか、やっぱり、移動しながら住みたい人のインフラってのは整ってきましたけども、個人的にそういう生活が、何となくここのステージでは、家に求めてたものっていうのは、多分、違うところに住んでみたいという欲望というか、ここに住んだらどう思うんだろうとか、ここの駅の距離感とか、ここのお店

の量とか、そういう職場との距離感とかに対して、どう思うんだろうみたいな、そういう感覚が強くて、家の内部に対しての感覚がほぼなく、もう寝に帰るだけっていうような造りの家を転々としていたというような気がしています。

その後、実は、北野に住み始めてからいろいろあって、独立しようということで、12年前、今の仕事を始めます。それで、R不動産を始めて、さっきの外国人のマンションなんかはまさしく、神戸界隈、阪神間にある、ある意味、産業遺産ではないですけど、非常に特徴のある面白い物件がたくさんありまして、そういう物件とか、古くて趣がある物件も含めて、いろいろご紹介をさせていただいたんですけど、自分が住み始めたのは、まず初めに、店を構えて、その奥に住むみたいなことをやり始めるようになりました。これ、職住近接みたいなコンセプトは、いろいろ商店街の方とか、昔からしてらっしゃると思うんですけど、考え方が変わって、内装工事も自分たちでちょっとやって、そういう家に住み始めました。ここはここで、今度、事務所として使い始めるんですけど、完全に。

次は、また外国人マンションに引っ越して、めちゃくちゃ広い外国人マンション。180平米のマンションだったんですけど、家賃が高いので、その家賃を補うために、当時、はやり始めてた民泊をやってみたいなと思って、民泊をやり始めて、家賃を少し民泊の運営で補填しながら住むみたいなことをやっていました。残念ながら、民泊はいろいろ法律的にグレーな状況になってきて、そのときにもう辞めてしまったんですけれども、これはこれで、実験としては、非常に面白かったなと思っています。今は、5年前に野菜の食料品店とシェアオフィスっていうのを北野坂のど真ん中で始めたので、結構、それは大きな事業として始めてしまって、かなり仕事が忙しくなってしまったので、その上の階に住むっていうことを。実際、今、ここに住んでいます。なので、基本的には、この人生の第2ステージにおいては、職住近接の家というか、仕事と家が一体化してる、そういうような感じの家でした。

今、実は、3年前に農村に家を買いまして、3個目のステージに入ってるかなというような状況にあります。場所は、神戸市の北区淡河町というところになりまして、完全に農村。ただ、神戸市内から30分で行けるというような場所になります。こちらで、農業スクール、先ほど農業の事業をやってると申しましたが、農業のスクール事業をやっています。自分たちでも野菜を作れたりとか、周りの人たちが野菜を作る技術を持ったり、農業に対する入り口をつくったほうがいいだろうということで始めました。買った家はこれなんですね。この大きな古民家なんですけども。普通、大きいから、都会にこういう家があるとすごい金額になると思うんですけれども、農村だと大した金額ではないです、正直言って。

間取りは、こんな間取りになりまして。先ほどの先生のお話にもありましたけれども、台所が北の端。北の端っていっても、真ん中ら辺ですけども。にあって、もともとおくどさんだった場所がそういう近代的な台所に改装されてたり、日当たりの一番いい左下の所が南なんですけど、こちらに和室があったりですね。いうような形なんですけど、広大な家で、500平米あって、家族で、結構、住んでらっしゃったっていうような所を、今は改装して、自分たちは実は、左上にある図面のところの居室って書いてある蔵なんですけど、蔵を改装して住んでます。隣の蔵とその隣の居室っていう所は、うちのスタッフが住んでまして、要は、会社の人間と一緒に住んでるみたいな感じなんですけど、母屋は今、その農業スクールの教室で使ったり、ゲストルームとして使ったりみたいな感じで使っています。で、図面の右側のほうに、納屋っていうのがあって、やっぱり、

すごくこの道具を入れる所が重要だなというのを農村に住んで、深く感じました。

こんな家なんですけど、これ、和室ですね。和室がこんな感じで。これは改装しているゲストルームです。家を、いわゆる古民家の場合、とても改装がしやすいというか、素人でも改装しやすくて、床はこれ、自分たちで張り替えました。土壁も自分たちで造り替えました。

そんなことをしながら、道具との関係を見ていこうと思うんですけど。当然、土壁をやろうと思ったら、いわゆる土を買ってきたり、あと、しっくい用のところもあるんで、しっくいをしたりとか。で、こういうコテが必要になって、あります。ここもまた別途、自分たちでタイル貼ったり、壁を塗ったり、棚を作ったりしたんですけど、こういうことを結構、日常的に作業を、ここではするようになりました。古民家、面白いのは、古民家のはりって、結構、木がむき出しになっているんですけども、そのむき出しになっている所にくぎをさせるので、くぎを打って、いろんなものをつり下げたりすることができる。日本の普通のマンションだと、くぎ１本、打ちにくいっていう、壁になんか打ちにくいっていうのはあると思うんですけど、はりに必ず、そういう気軽に打ち込める所があるので、こうやって物を飾ったりとか、なんか棚を作ったりとかいうことはしやすいですし、これ、ちょっと雑ですけど、配線をこうしたいなと思ったら、くぎを打って配線をつなげていけば、自分で電気配線もできてしまうみたいなような感じです。

ということで、非常に雑な、あまり美しくない写真で恐縮なんですけど、道具は必ず道具箱が必要で、常に道具箱は友達というような状況ですし、お庭には雑草とか、草がいっぱい生えてきますので、常に草刈りをするような状況です。この草刈りも、刃が付いてるやつと、ビニールテープが付いてるやつと２種類、使い分けながら、使ったりします。で、これをやるには、いわゆる混合油っていうガソリンというか、燃料が必要で、こんな道具も必要だったり、当然、草をかき集めるものも必要になってきます。農作業するのに、当然、鎌が必要で、手袋がもう友達みたいな感じで。一輪車が必要で、一輪車で土を運んだりしないといけません。こういうスコップがあったり、じょうろがあったり、剪定ばさみがあったりということや、日常的に使うもので、くわがあったり、三角ホーとか平鍬とか、くわの種類もたくさんあって、４種類ぐらい、それぞれ使い分けながら、これは農作業用ですけど、農作業をしたりしています。畑に石灰を入れたり、肥料を入れるようなものだとか、こういうようなことが必要になって、野菜ができたら、野菜を運ぶケースが必要になったり、こういう位置で、荷台みたいなものも必要になってくると。

いうことで、道具、今まで荷物、何も持たないで生活してたのに、荷物だらけになって、どうなってしまったんだろうと自分でも思いながら、ただ、この家に住むと、必ずこの道具が必要で、この道具がないと、やはり、快適に住めないっていうのが農村だっていうことがよく分かりました。逆に、今、どっちが好きだって聞かれても、こっちの生活のほうが自分的には好みだなっていう感覚に移りつつあります。

こうやって、シイタケを干すとか、木を切ることがかなり多いですね。のこぎりが友達で、木がいっぱいできたら燃やして、外で温まるみたいなことをしたり。こうやって、外の作業が多いので、土間空間っていうのはすごく大事で、土足で入ってっていうスペースが非常に貴重で、日本の古民家には必須の空間だなと思います。まさに、これが土足から上履きに徐々に変わっていく空間という意味でも、先ほどの先生の話に少し通ずる話もあったなと思ったりはしていました。ここに、土間空間にソファを置いてみたりしています。ほうきがあったりですね。そういう作業が終わると、あったかいお茶を飲みたいなってことで、いろいろいい器も置きたいな、そんな大

した器ではないですけど、いい器でお茶をほっこり飲みたいなっていうのもありますし、ちゃんとした器で、基本、ここにはコンビニもないので、全部、自分たちで野菜を、近所の人からもらったもので作る、もしくは、自分たちで育てたもので作るという生活をしています。ダイコンの葉っぱを炒めたものとか、ニンジンとゴボウを炒めたものとか、こういうようなものを日々、食べて、楽しんでいます。

この人生サードステージの家は、自産自消の家というか、自分で作って、家も自分で直す。自分で野菜も作る。そういう食事も自分で作る。将来、チャレンジしたいのは、エネルギーも自分で作るっていうふうなことに、挑戦をしてみたいなと思ってるんですけども、いわゆるお金が都市の中ではかかるものを、できるだけ自分で生産するという活動の家になればなということも思いますし、農村の家ってそういうものだなということが最近、分かってきました。こんなふうに第１ステージ、第２ステージ、第３ステージとステージが変わってきたわけですね。

話が大きく変わるんですけれども、昨今の環境問題みたいなことに照らし合わせて考えて、最後、締めくくらせていただきたいと思います。リニアエコノミーという、今、現在、われわれが生きている世の中は、原料が生産されて、使用されて、廃棄されて、最後、ゴミになって終わるっていうリニアエコノミーの状態ですけども、世の中、サーキュラーエコノミーですね。循環させる。使用してはリサイクルしていくというようなサイクルに変えていこうということが、昨今うたわれています。実は、エレン・マッカーサー・ファウンデーションというイギリスの財団が作ったバタフライダイアグラム。サーキュラーエコノミーにおいて重要なことはこれだっていうことをいって、なるほどって思った話なんですけれども。これ、二つのサイクルに分けていくべきだというふうに語られています。一つは生物学的サイクル、もう一つは技術的サイクルといわれてて。

要は、簡単にいうと、土に戻せるものと土に戻らないものを分けて考えましょうっていう考えなんですね。土に戻る食品、食べるものとか、木とか、土とか、多分、江戸時代、日本で生産されてたものは、全て土に戻るもので作られてた。それが近代化しだしてから、土に戻らないものが生産されて、今、それが環境問題として、大きな問題になってるけど、じゃあ、そこに、江戸時代に戻るのかというと、現実的に戻れないよねってことで、分けて考えないといけないという概念が今、世界的に語られているという中で、自産自消の家っていうか、農村で暮らすっていうのは、土に還るもので暮らすっていう生活だなというふうに思っております。

逆に、土に還らないものっていうのは、僕が初めに体験してたノマド生活の家。つまり、リースする家と。分かりにくい表現なんですけど、何かといいますと、要は、都会に住んでいると、正直、家っていうのは、寝るだけの空間に近くなってくるのかなというふうに思っていまして。逆にいうと、美学を追求するのであれば、家ともっと設計者が作った家具とか、備品とかがセットになってるほうが長く使えるし、美しいものがずっとそこに生き残っていくんじゃないかなというふうに思ってます。いちいち使用者が変わるごとに中身を変えていくから、どんどん安いものがはびこって、廃棄するっていう流れになってくるんだと思うんですけど、そうじゃなくて、もっと使っていくという観点でいうと、そういうリースするっていう。

正直、賃貸マンションだったら、リースっていうイメージ分かると思うんですけど、分譲マンションも、僕はリースとほぼ同じだなと思ってまして。住宅ローンってのを組んで、ほぼ定額の家賃を払っていくっていうようなこともありますし、管理組合というか、管理会社さんがいて、基本、全て管理をやってくださって、居住者っていうのは、あまり住むという行為に対して手間をかけ

たくない。この自産自消の家に比べたら、手間は全くかからないわけで。どっちかに二極化していくんじゃないかなっていうのが、僕が20年ぐらいを振り返ってみて感じたことでした。ということで、すいません。時間を少し長くなっちゃったんですけれども、感覚的な話になってしまいました。ご静聴、どうもありがとうございました。